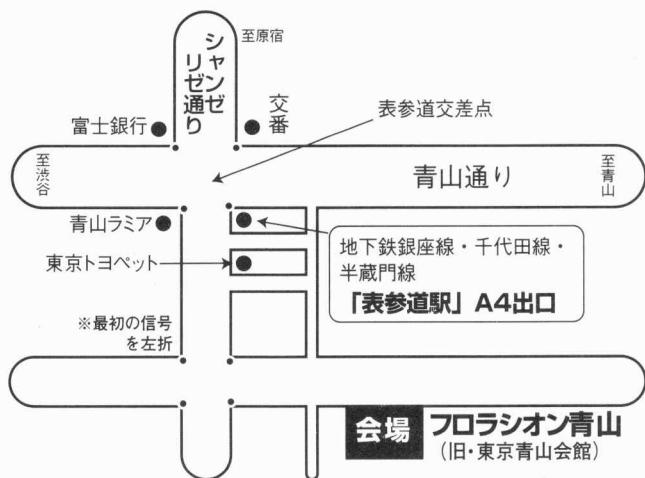




日時：5月13日（木）午後6時
場所：ホテルフロラシオン青山
東京都港区南青山4-17-58
電話（03）3403-1541
会費：1万円（学生は5千円）
なお、年会費2千円が含まれます。

※E-Mailでの参加申し込みも受け付けます。
 (山田武秋) yam-room@netlaputa.ne.jp
 (船越巧子) FKPA7199@Jpo-miti.go.jp<職場>
 fwka9781@mb.infoweb.ne.jp<自宅>

第30回在京白堊会総会のご案内

スリーナイン
九九九、飛躍！
新しいミレニアムへの旅立ち。

在京
白聖會報

第6号
平成11年4月1日

発行 在京白聖会

東京都港区虎ノ門一丁目十六番八号

飯島ビル 202号

星野健秀法律事務所内

TEL 03 (3506) 8844

$$\begin{array}{r} \text{FAX} \\ 03 \\ (3503) \\ 7854 \end{array}$$

第30回総会は、42年卒の私たち疾風会が幹事担当です。疾風会は42年をシブウと読んだもので、ヒゲの名物教師、美術の故・福田隆先生に命名していただいたものです。

私たち疾風会は、第30回総会のチャッチフレーズを次のように決めました。

「九九九（スリーナイン）、飛躍！
新しいミレニアムへの旅立ち。」――

センチュリーの百年紀に対して、ミレニアムは千年紀。21世紀を目前としたこの混沌の時代に、私たちが先頭に立って新しい疾風（かぜ）を起こしましうというメッセージをこめました。

ところで、私たち疾風会が取り組む今年の在京白聖会総会の特色は、次の二点です。

- 一、オール疾風会として取り組む
- 二、ホームページの活用

一については、本来、在京疾風会だけで幹事をすればよいわけですが、盛岡の在郷疾風会との交流も深く、人材の応援を頼んだこともあって、この際オール疾風会の行事として取り組もうということになりました。当日は盛岡をはじめ各地から疾風会会員が駆けつけますので、よろしくお願いいたします。

事務所変わります

総会で事務所変更が提案されます

(新・事務所案)

昭和41年卒 馬場 信

(産報出版(株))

す。

二については、同窓生の尽力で在京
疾風会のホームページを今年の一月に
立ちあげ、準備速報や進捗状況を案内
しています。三月初め、すでにアクセ
ス数は一千件を超えました。どなたで
もアクセスできますので、ぜひご覧に
なってください。特に若い会員の方には、在京白壁会的一端をお見せできる
と思います。掲示板や関連のリンクも
ありますので、たとえ総会に参加でき
なくても、メッセージだけでもいただ
ければ、今後の運営の参考にさせてい
ただけるとと思います。

当日は、
猛者（土人）踊りをモチー
フとしたイベントも準備
しておりますので、どう
ぞお誘い合わせの上、大
勢で参加下さい。

<http://www.bekkoame.ne.jp/~yasatou/>



巻頭言

在京白聖会三十周年を迎えて



会長 及川昭伍（昭和25年卒）

この五月十三日に、在京白聖会は創立三十周年を迎えます。この三十年間、本会の活動に協力してこられた同窓の諸兄姉に心から御礼申し上げます。この間には、工藤祐正先輩をはじめ、多くの先輩が物故されました。改めてご冥福をお祈りします。

会の創立総会は、昭和四十四年五月十三日に、上野精養軒で百名余の同窓生を集めて開催されました。その前年の八月に盛岡一高野球部が甲子園に出場し、準々決勝に駒を進めました。弊衣破帽、高下駄の応援団がテレビで何回も全国放映され「旧制高校の化石のような学校だ」と言われたのが、このときでした。軍艦マーチの校歌が勝利のたぎに歌われ、有名になりました。同窓の有志多数が甲子園に応援にかけつけました。それを契機として、在京白聖会発足の機運が盛り上がり、翌年創立総会が開かれたのです。白聖同

窓会「東京支部」ということにすると、本部からの規制を受ける。母校の事業への割当的な協力も要請される。しかし、在京白聖会は、会員の自発的な盛り上がりによる独立の自主的な会にしたいということで会員相互の親睦のみを目的とする会則が定められました。

事務局を、昭和十七年卒の工藤祐正弁護士事務所をお願いすることだけを決めて、会長も置かず、誰もが会長であり、会員であるということで運営してきました。毎年、母校の創立記念日である五月十三日に総会を開いてきました。総会は、上野精養軒で、十回、東郷記念館で十八回開きました。創立二十周年には、私が編集長役になって、記念誌を発行しました。第十四回の総会から満五十歳となる年次が総会幹事を担当することとして現在に至っています。

創立時の推進役となった昭和三年卒の長瀬先輩は、昭和五十八年に他界されました。創立以来、事務局と代表幹事役を果たしていただいた工藤先輩も平成四年に他界されました。平成四年からは、昭和四十三年卒の星野弁護士に事務局をお願いしています。

本会は、最近、若い人達の参加が多

くなり、会員名簿登載者も四千人を超えるようになりました。規模の拡大に伴い、会執行体制の整備の要望が強くなり、平成八年に規約を全面改正して、体制整備を図りました。同年から会報を年二回発行して、情報の緊密化を図ることにしました。

母校の盛岡

一高は、明年創立百二十周年を迎えます。それまでには、5階建の新しい校舎が完成する予定です。百二十周年の記念事業も計画されており、募金活動も行われると聞いておりますが、在京白聖会としては、規約及び創立時の精神にのっとり、募金割当などについて、会としての取りまとめは行いません。各個人の自主的な判断による対応をお願いいたします。

故郷を遠く

——新校舎完成予想図——



離れた東京で、青春の学舎を共にした者が、社会のしがらみを離れて親睦交流を図るといふ、当会創立の精神を受けつぎながら、楽しい会合を続けていきましよう。

創立三十周年の総会への多数のご出席をお待ちしています。

在京白聖会総会記念 S 53 5 13 於 上野 精養軒



在京白聖会三十周年特集

東京の雑踏の中で

生活していると時折故郷がなつかしく思ひ出されるのは誰でも同じである。その中でも旧制盛岡中学（現在の盛岡一高）出身の人と会うとそのなつかしさが具体的にになる。そこには利害も理屈もない。時を忘れて話がつきないのである。

である。

在京白聖会も現在のような体制で運営されて十三年になる。盛岡一高には白聖同窓会があるが、在京白聖会はその組織、運営はきわめて自由であり、会員の盛り上った気分により運営されている。たとえば会員の全員が会長であり、特に会長という役職はなく、会の目的も親睦のみである。しかしこれが白聖同窓会の重要な戦力となっている。

を離れて故郷のありがたみが判るのである。在京白聖会の会員の母校に寄せる思いは格別なものがある。しかし卒業生の全員が皆成功し、高い社会的地位を得ている訳ではない。中には健康に恵まれずに才能を発揮できず若くして世を去った先輩、後輩があり、人の運、不運は避けることはできないのである。しかし運のよい者も運の悪い者を一堂に会し、中学、高校の時代の共通の思い出を語り合えることはまことに楽しいものである。

工藤先輩を偲んで（遺稿その1）

在京白聖会について

工藤 祐正（故人）

かのようにして旧制盛岡中学ないし現盛岡一高の出身者が年に一度会合し、酒を酌み交わす機会をつくるのが在京白聖会

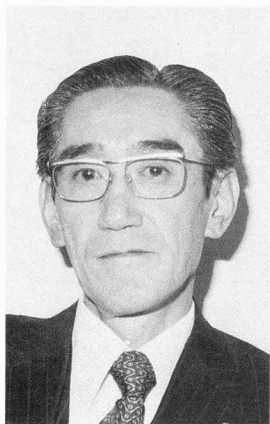
ることは各人がもともとよく知っている。毎年五月十三日の創立記念日に総会

を行っていたが校長その他の役員の方の都合を考え昨年からは五月十二日に行っている。毎年二百人内外の会員の出席がある。

た。しかしひるがえって私の少年時代を、良い思い出とするか否かは矢張りこれからの私の生き方にかかっているように思えてならない。盛岡中学時代の思い出は私のみが感じたものであり私のものなのである。毎年卒業するこれからの人々に、盛岡一高の思い出を大切にもらいたいとの思いや切なるものがある。

（元代表世話人・昭和17年卒）

— 朝日新聞（昭和58年）より —



昭和43年、甲子園出場で 在京白聖会がスタート！



ベスト 8 進出、盛一サイン

アルプススタンドで整然と応援



「世に詠われし、浩然の……」

工藤先輩を偲んで（遺稿その2）

「無理スナ・・・」

工藤祐正（故人）

「無理スナ、無理スナ、無理ステ死
ンダ人アルジェ」。

なんとも味のある言葉である。他人が難事に対決しようとしている。何とか味方して助けてやりたいが自分の力ではどうにもならない。しかし「ヤスメ」とも言えない時に発する言葉である。「お前には無理だ」、やるなら死を覚悟しろ」という意味であるが、身の程を知れというひやかしの意味もあるし、相手のおそろしさを表現する意味もあるし、ばかばかしい命を賭するような問題ではないとの意味も含まれている。

人間は何かにぶつかり、苦労しながら経験を積み重ねて行く、「無理」かどうかは自分が決める問題である。しかし無理と判断してやめることができるなら事は簡単である。やめようと思ってもやめられないところに人の世のむづかしさがある。

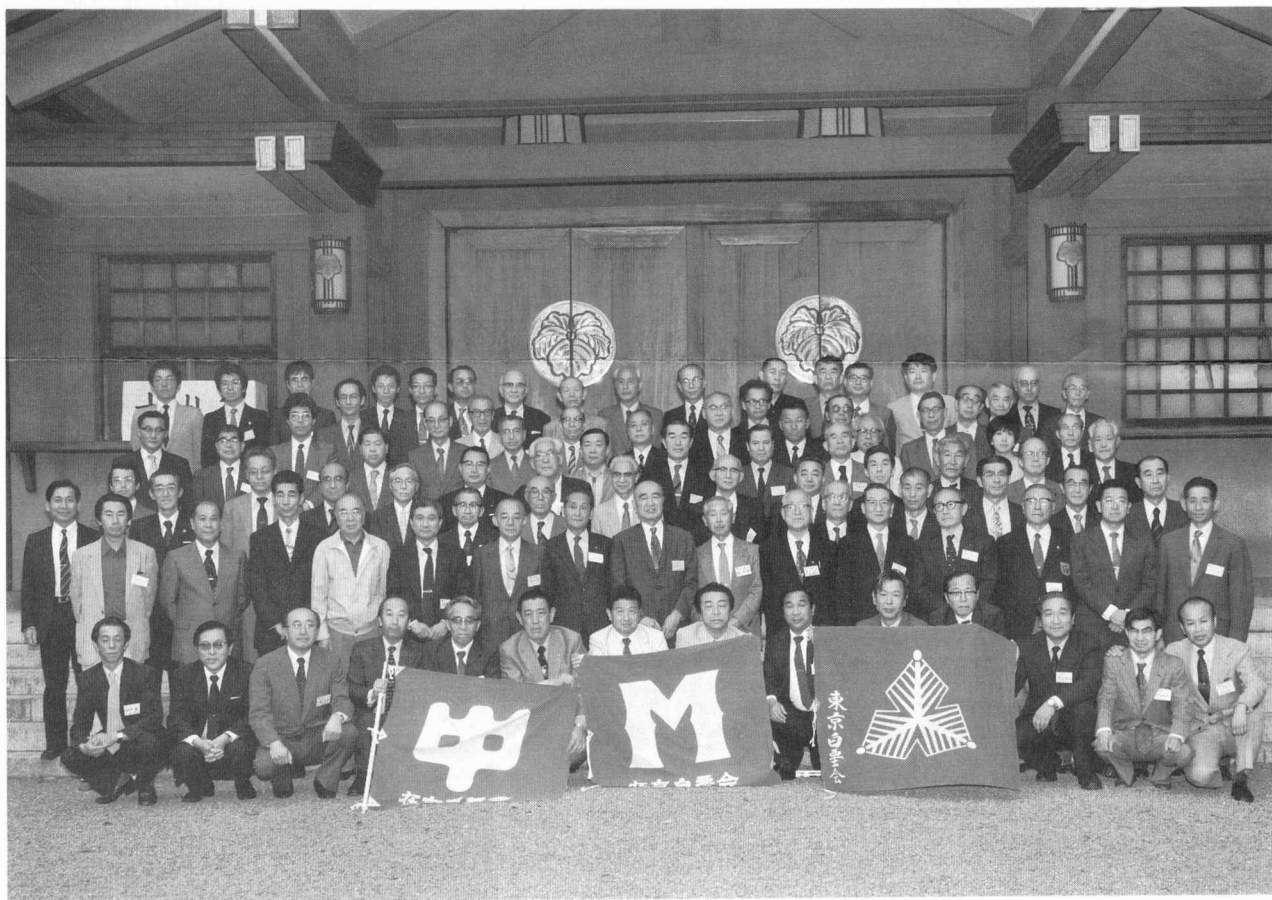
無理かどうかは案外他人の方が判っているのかも知れない。

人間は何かをすれば抵抗がある。抵抗がない時はやらされている時である。やる以上は抵抗は覚悟せねばならない。物事を「ほどほど」やることぐらい難しいことはない。やるか、やらないか、「無理スナ、無理スナ・・・」である。

（在京白聖会20年誌より）



ありし日の工藤先輩（右端）



同期の桜

男女共学一期生の同期会



昭和25年の盛岡一高 1年6組

我々は新制中学から高校進学した一期生であるが、二百八十八名（内女性百八名）の卒業のうち七十七名（二十三名）が在京で、近年三、四十名が集まり呑んで食べてダベッている。

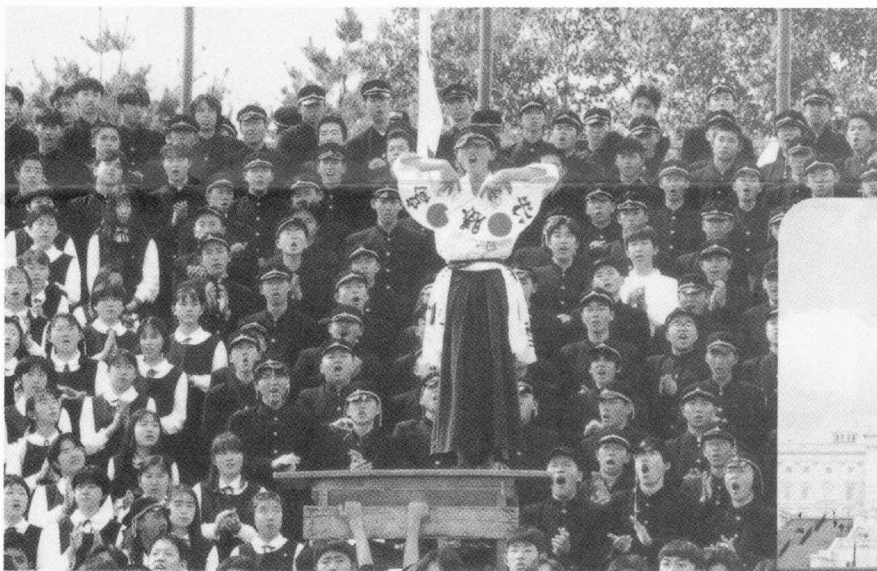
きっかけは一九八五年の第16回白聖会総会の幹事を工藤祐正先輩から仰せ付かったことに端を発している。丁度

50歳、人生の節目でもあり準備のため何回も集まり良くダベッタものだ。総会も終り先輩から来年も幹事をという要請を断り二十九年卒に引継いだのである。これ以降50歳の年次が幹事を勤める伝統が出来上ったものである。

それと共に我々昭和28年卒業生しか経験することが出来なかった特権がある。昨年亡くなられた工藤巖前知事が一年間だけ母校の教壇に立ったことがある。昭和二十五年四月に当時の盛岡高校上田校舎に赴任され、一年六組の担任（写真中央が工藤先生）と英語の授業を受け持たれ、丁度その時入学したのが我々なのである。翌年四月には県庁へ移られたので我々「一年六組」だけが先輩（昭和14年卒）に教えられた教え子なのである。吾々の同期会には衆議院議員で公務多忙の時でも、度々出席され昔話に花を咲かせておられたのを思い出す。最後にご出席頂いたのは九四年七月、繋温泉のホテルで開かれた還暦記念28会で、副知事だった同期の高橋会則君（現参議院議員）と一緒に来られ、ホテルの関係者がびっくりした記憶がある。その日も控室に挨拶に向くと一緒に出席された先生方にご自分の病状を客観的に説明されていたのが印象的であった。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げる次第である。

小田島雅也（昭28卒）

そして、今… 平成の盛岡一高は



高校野球の応援



海外派遣

（「盛岡一高案内」より）

白聖人脈

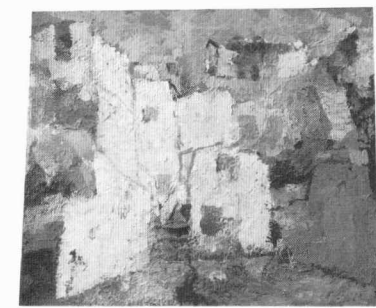
夢色で描く人生のキャンバス

画家 三浦千波 (昭和50年卒)

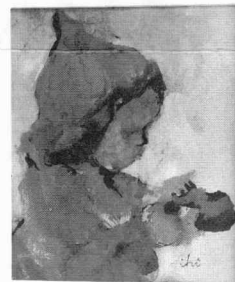
いつもニコニコ、明るい笑顔が三浦千波さんのチャームポイント。どこにあの濃厚なタッチの画風を生み出すパワーが潜んでいるのか、とても不思議です。

盛岡一高昭和50年卒業で名門(?)の絵画部出身。三浦千波は今が「旬」、画家として、脂の乗りきった時期でしょう。昨年は、盛岡の川徳デパートで個展を開き、故郷に錦を飾りました。

最近、盛岡の海運橋からギリシアのエーゲ海の島々まで、油絵を中心にした個性的な作品の数々。繊細な感性と大胆な色調が、三浦さんの絵の魅力です。そして、絵のまわりに漂う、そこはかとなく香るほのかなロマンチズムを、編集子は発見しました。



「白聖アーティスト」のホープである三浦千波さんを、みなさんで応援しましょう。



「白聖の翼」は自由の風に乗って

衆議院議員 達増拓也 (昭和58年卒)

私が入学した昭和55年、盛岡一高は創立百周年を迎えました。様々な記念事業がありました。ひ



中央が達増さん



個展での三浦さん

ときわ生徒の心をときめかせたのは、「白聖の翼」こと、海外派遣、略して「海派」であったと思います。

私は第三回の「海派」団員として、アメリカのスマスタウンに行きました。海派が始まって三年目で、まだ慣れないことも多く、出発直前に行き先が変更され、ホームステイ先は行ってみなければ分からないという冒険的要素十分の旅でした。

未知の世界で言葉もろくに通じず、危機管理状態の中で、様々な交流活動を行いながらしつかり何かを伝えあわなければ、ということ。団員一同必死の四週間でした。あのくらい真剣に

過ごした日々はそうありません。団員の仲間とは卒業後も「戦友」として付き合いが続いています。

未知に対して自分の心を最大限オープンにしなが、自分の判断や行動に責任を持ちつつ、みんなと協力して何かすごいことをやり遂げようという、そんな我々の志は、アメリカが理想とする自由な個人主義とぴったり合致するものでした。自分の「思い」と、会う人会う人から伝わってくるアメリカの精神がシンクロし、本当の「自由」というものが持つパワーを全身全霊で感じる毎日でした。その後、大学での勉強や、外務省や国会での仕事を通じて私が求め続けているのは、あのとき体験した「自由な個人主義」のきらめきであるように思われます。

「海派」は一高の自由な校風から出てきた事業です。自由の風に乗って「白聖の翼」は世界を飛翔し、母校に帰ってくると校内に自由の風を吹かせます。自由の風のフィードバックです。「海派」開始以降、海派に参加したしに、関わり、海外で働いたり、留学したり、青年海外協力隊に参加したりする卒業生が後を絶ちません。国際的な人材が続々と輩出されているのです。外国に行かなくても、世界に通じる見識や感性で、大いに活躍するケースが増えていきます。

自由の風が、今日も爽やかに母校を吹き抜けていくことを願って止みません。

詩部門で盛一、連続入賞!

第十三回 全国高校文芸コンクール



トランペット

盛岡一高三年

三神 愛

詩部門

最優秀賞

文部大臣奨励賞

降りてくる、

透きとおる青色の霧。

獣の喉にせりあがっていた

腥い黄汁が

真水に変わって

喉を滑って

そのささくれた内腑に

やさしく、

やさしくしみとおっていく。

空の近くに立つ少年の
白銀の管から飛び立つ
青く透ける長い尾
鳥が翔けていく。
硬質な朝空に伸びていくのは
つぶつぶ踊る宝石の帯。
天上への路は端から溶ける。
澄んだ水の宝石がはじけて
その色はゆるやかに
大気に裾野をひろげる。

断崖にへばりついた獣たちが

饑えた汗にまみれ

醜い脂に埋もれ

他より少しでも上へと

岩肌を這い上がる。

その鼻先を

青い尾がかすめて過ぎる。

はっと面を上げた獣の
ざらざらと粘つく瞳に

造られた物の極みを突き抜けるため
鳥の削り続けた肉を
骨を
誰も知らない。
ここにもある、
ひとつの闘いのかたち。
いつかたどりつく
蒼穹の高みを目指し
鳥は翔けていく
青く透けるその尾を
朝空に
長く強くひいて。

在京白聖会がこの大都会・東京に産
声をあげてはや30年。あらためて、時
の流れの速さを感じる。そして、母校
・白聖は来年、西暦二千年に創立百二
十年。

白聖の伝統って何だろうな、と考
えるとき、いろいろ脳裏に浮かぶ。質実
剛健、自由、政治家・文人群像、文武
両道、先輩後輩の絆……最近の傾向を
みると、若手の文化面での活躍がめざ
ましい。

本号でもお伝えしているよう
に、昨年の高校生文芸コンク
ールで再び盛岡一高の後輩が、一
昨年に続き最優秀賞（文部大臣
賞）の栄冠をしとめた。啄木・
賢治以来の文化的風土が、いま
だ脈々と息づいている証しだろ
う。

また、在京白聖会のOBの若
手からも「文化芸術のホープ」
が確実に巣立っている。例えば、
編集子の知っている範囲では、
この会報の「白聖人脈」シリー
ズで紹介しているが、画家の三
浦千波さん（昭和50年卒）、書道



原田さんのコンサート

青春白聖

家の佐藤法雄君（同）、ヴァイオ
リニストの原田智子さん（昭和
58年卒）、そしてピアノリストの森
知英さん（昭和63年卒）……。
もっとたくさんいらっしゃると
思うが。

彼らの素晴らしいところは、
実力もさることながら、その
「ポリシイ」の健全さにある。
原田さんは、盲導犬のための
チャリティー・コンサートを続
け、森さんは小学校のコンサ
ートも全国で行い、書家の佐藤君
は盛岡で地域に根ざした書道教
室を開こうと奔走している。

「芸術の果実」を社会や郷土に還元
しようという、純粹な気持ちに彼らに
感じられる。これこそが、これからの
白聖スピリットの一つのあり方だろう。
天下国家もすばらしいが、地道に社会
や地域に貢献する生き方も賞賛される
べきだろう。

在京白聖会30周年にあたり、第四応
援歌「桂冠ここに八十年……」を高吟
した編集子の、このごろの「思い」を
先輩諸氏にも伝えたい。



小学校でピアノを弾く森さん